

適切な仲間関係をつくる学級活動における 支援の在り方に関する研究

- 学級集団の発達的特質から見た、個と集団の関係を高める授業実践を通して -

川副町立中川副小学校 教諭 荒木 憲一

要 旨

本研究は、集団活動の発達段階に応じた学級集団の在り方を「適切な仲間関係」ととらえ、仲間関係づくりの授業実践を通して、学級活動における支援の在り方を探っていったものである。学級内の友人関係に関する個々の児童の実態と学級集団の状態から、集団活動の発達的特質を洗い出し、発達段階と指導の手立てを定めた上で、仲間関係づくりの活動を行った。話し合い活動を中心とした、他者意識をもたせる取組が、個と集団の関係を高め、適切な仲間関係へと向かわせる支援の一つであることが、明らかになった。(個々の児童の実態から考えられる学級集団の様子を「状態」と記述している。)

<キーワード> 仲間関係 発達的特質 発達段階 個と集団の関係

1 主題設定の理由

今回の学習指導要領解説特別活動編で明記されている児童期の発達課題の中でも「友人との適切な仲間関係の成立」は、社会環境の変化に伴い人間関係が希薄化した現代の子どもたちにとって、集団を体験しながら育成されなければならない課題の一つと言える。学級活動の特質は望ましい集団活動を前提としている点にあり、この特質を生かした様々な人間関係の体験こそ、他の教育活動と異なる教育的意義がある。

仲間関係づくりは、児童の実態と学級集団の状態を把握し、発達段階に応じた望ましい関係に向け、今後の発達に見通しをもって取り組む必要がある。そこで、学習指導要領等にある発達過程を、更に発達段階として整理分析し、特質や段階を踏まえることで、個と集団の調和的な発達を支援していけると考える。

本研究では、単なる仲よし関係ではない、発達段階に適した集団生活での児童同士の結び付き、集団の状態を「適切な仲間関係」ととらえ、児童自らが相手や周囲のことを考えた行動を取れるようにしていきたい。そのためには、児童それぞれが互いの気持ち、考えを認め合って実践へ向かう学級の状態が望まれる。そこで、実践へ向けた問題解決を図る「話し合い活動」において、個人の発言と話し合いの関係に注目し、児童一人一人の考えが尊重され、集団決定にかかわる考えをもてるような支援を行っていきたい。個々の児童と学級集団の関係を高めていく話し合い活動を中心とした取組での支援を行うことが、児童自らが集団との向かい方を考え、行動し、仲間としての結び付きを強めていくと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

適切な仲間関係に向けて、実態に即した集団活動の発達的特質や発達段階をとらえ、個々の児童と学級集団を高めていく授業実践を通して、学級活動における支援の在り方を探る。

3 研究の仮説

仲間関係づくりを目指した学級活動において、個と集団に視点を置いた次の手立てを取れば、集団への所属意識をもった仲間としての結び付きを強める児童が育つであろう。

学級における友人関係について、個々の児童及び学級集団の実態分析を基に、集団活動の発達的特質と発達段階の見通しを踏まえた指導の手立てを定める。

単元の導入期に、個々の児童の状態を高める活動を行い、友達とのかかわりのよさを体験させる。実践へ向けた問題解決を図る話し合い活動、実践活動を通して、集団での充実感や達成感を体験させる。

4 研究の内容と方法

学級における友人関係の調査を基に、児童の実態と学級集団の状態を把握する。

集団活動の発達の特質及び発達段階についての理論研究を行い、本学級に合った手立てを研究する。仲間関係づくりへ向かう話し合い活動、実践活動の検証授業(第3学年)を行い、その結果を分析する。発達段階に適した仲間関係づくりへの支援の在り方に関する研究の成果と課題を検討する。

5 研究の実際

(1) 本学級集団の発達の特質と発達段階

時期や学年にとらわれない、集団の発達の傾向を示した「集団活動における九段階の発達の特質」⁽¹⁾を一つの指標として、本学級集団の発達の特質を洗い出し、発達段階の程度をとらえていった。また、次の段階への見通しをもって、現在の段階でどのような働き掛けをし、体験をさせるべきかの指導の手立てを設定して実践授業に向かうこととした。(図1参照)



図1 発達段階に即した指導の手立て設定までの過程

(2) 研究の全体構想

研究の全体構想を図2に示す。

個々の児童の学級生活への意欲、学級内での承認意識と被侵害意識、そのことから分かる学級集団の状態をQ-U評定尺度法⁽²⁾で分析する。また、児童の友達関係をソシオメトリーで分析する。実践の結果を検証するために、この2つの質問紙法を実践後で実施し、その変容を考察するのに活用する。

実態把握、学級集団の発達の特質と段階から設定した指導の手立てを基に、検証授業を行う。検証授業での活動やその後の日常生活において、発達段階で望まれる仲間関係（適切な仲間関係の要素を充たしていること）に向かっているかを見ていく。

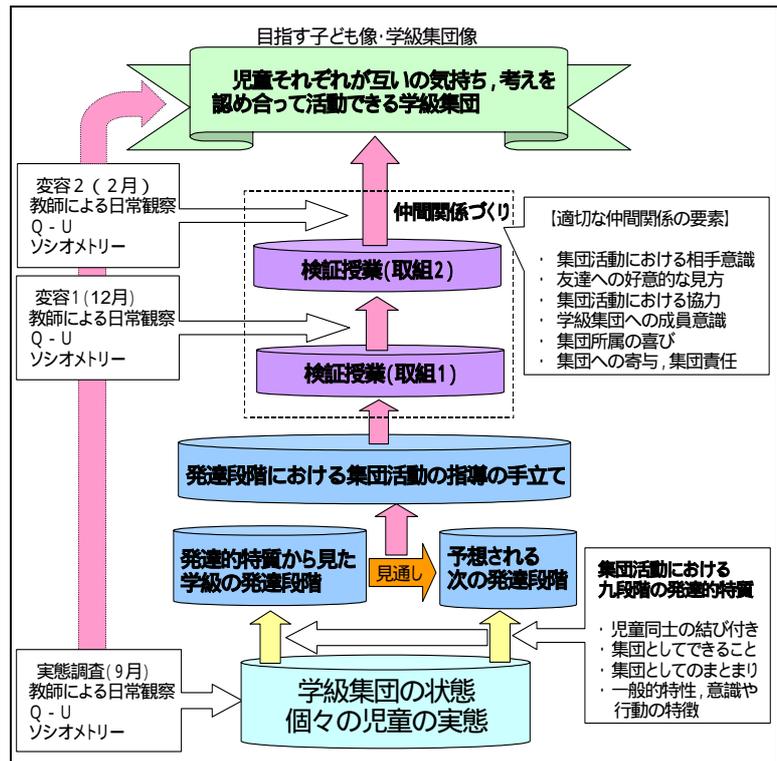


図2 研究の全体構想

(3) 単元の構想

図3に示すように、学級集団の発達段階に合った仲間関係づくりを、取組1（仲間づくり）と取組2（学級内の組織づくり）で行う。

取組1では、まず、承認意識が低い内容と、被侵害意識が高い内容を実態調査から把握し、構成的グループ・エンカウンター（SGE）を用いて重点的に取扱う。個の高まりを学級生活で生かしていくために、仲間づくりの実践へつなげていく。ここでの話し合いは、自分の考えと違う立場に立って考えたことを意見交換し、初めの自分の考えを見直させることで実践へ向けた問題解決の見通しがもてるようにしていく。さらに、集会活動で友達とのかかわりを楽しむ活動と、友達に対する見方を広げる活動を行い、日常生活の意欲化を図る。

取組2では、学級生活の充実と向上を目的とした、学級生活に必要な仕事（係）とその工夫を全員で話し合っていく。それまで

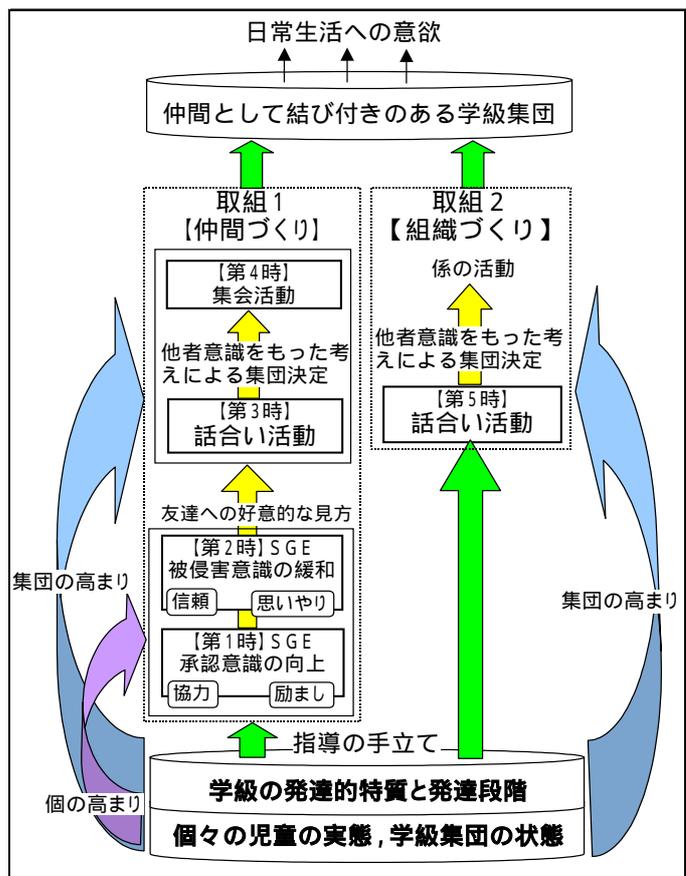


図3 単元の構想

まで考えていない工夫の視点を投げ掛けて、学級全員の協力が得られる工夫を話し合うことで、他者意識をもった考えへと広げさせ、集団決定を行う。このことが、実践となる係活動で、集団への所属感、仲間と行う充実感がもて、組織としての仲間関係を築いていけると考える。

(4) 検証授業（第3時：取組1の話合い活動「クラスのみんなが仲良くなる楽しい遊びを決めよう」）

自分の考えとは違う立場での意見交換を通して、児童は他者の存在を実感する。さらに、初めの考えを見直すことで、一人一人に他者意識をもった問題解決への見通しをもたせる。そこには、自分の考えの再確認、他の考えへの歩み寄り、他や新しい考えへの転換があり、児童たちは自分の考えを、他者意識をもった集団決定にかかわる考えへと高め、自己理解や他者理解の深まった姿で実践へと向かう。

話し合いの柱「『みんなで遊ぼう』は何をするか」（15分ずつの遊びを2つ決める話し合い）

自分の考えを出し合う 自分が支持する遊びについて考えを出し合う。
 全員の賛同で1つ目の遊び「じゃんけんゲーム」を決定。
 2つ目の遊びをドッチボールとフルーツバスケットのどちらにするかの話し合いになる。

自分の考えと違う立場に立って意見交換をする 会議ノートに書き込み、発表し合う。
 児童番号の 囲みは女子。

【ドッチボール派】

C : 楽しそうだし、みんなも知っていると思うから。
 C 9 : フルーツバスケットはみんなが楽しくできる。
 C : みんなが動いて、鬼にもなれるから楽しいと思うのかな。
 C : いすを用意するだけでいいのにな。
 C 3 : いすを早く取るのが楽しいのにな。



視点を与え、新たな発想をもたせる

【フルーツバスケット派】

C : ドッチボールはみんなができそうだから。
 C 5 : ドッチボールは、昼休みによくやっているから、楽しくできる。
 C : みんなやったことがあるし、ルールも知っているから、きっと楽しくなる。
 C : みんながルールを知っている。（でも、ずるする人がいると、いやだな。）
 C : とくどきやっていて、楽しいから。（でも、男の子の強く投げたボールに当たると痛そうだな。）

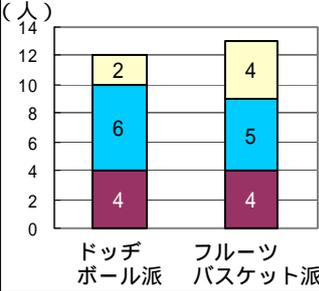
初めの自分の考えを見直す 改めて考えた解決方法を会議ノートに書き込む。

【ドッチボール派】

C : どちらの遊びもいいと思った。ずるをしなかったら楽しくできそう。
 （歩み寄り）
 C 9 : ドッチボールだったら、順番に投げるようにしたらいい。
 （再確認）
 C : いすを取るとき、けんかにならないかったらいい。
 （歩み寄り）
 C : 強く投げたボールは痛いだろうな。フルーツバスケットの方が簡単で、けんかもないかな。
 （歩み寄り）
 C 3 : フルーツバスケットは、後からお尻で押されてずるをされる。
 （再確認）

自分の考えの見直し状況

■再確認 ■歩み寄り □転換



チーム	再確認 (人)	歩み寄り (人)	転換 (人)
ドッチボール派	4	6	2
フルーツバスケット派	4	5	4

【フルーツバスケット派】

C : みんなに投げさせてくれたら、ドッチボールでもいい。
 （転換）
 C 5 : 男子は左手で、女子は右手で投げたらいい。
 （歩み寄り）
 C : ドッチボールを強く投げないならいい。
 （転換）
 C : ボールを強く投げなくても、ずるする人がいるから、いや。
 （再確認）
 C : みんなが交替で投げるなら、やってもいい。
 （転換）

異なる考えを尊重しながら、今後の方向を集団決定する

対立する遊びのルールを変えればやってもよい、という考えが多く出る。
 司会：ドッチボールがいいと思う人？（14人）フルーツバスケットがいいと思う人？（11人）
 （ざわついている中で、両方できないか、という声が出始め、「両方する」という意見が出る。

ドッチボールだけする（2人）
 フルーツバスケットだけする（0人）
 両方する（23人）

➔

集団決定
 1つの遊びの時間が短くなるけど、どちらもしよう。

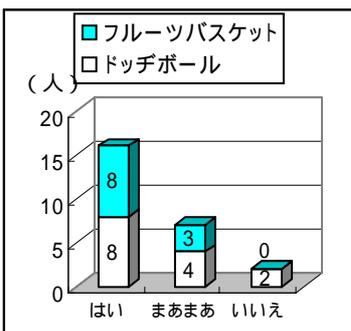


図4 集団決定に満足か

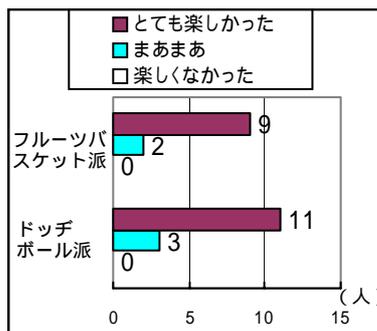


図5 実践してみてもうか

図4より、25人中23人が集団決定に満足、ほぼ満足し、どちらの派も「はい」「まあまあ」の回答が多いことから、他者意識をもたせた話し合いで十分な解決に近づいていることが分かる。

図5より、どちらの派も「とても楽しかった」の割合が高く、話し合い活動が実践活動につながっていると考える。

(5) 単元を通しての考察

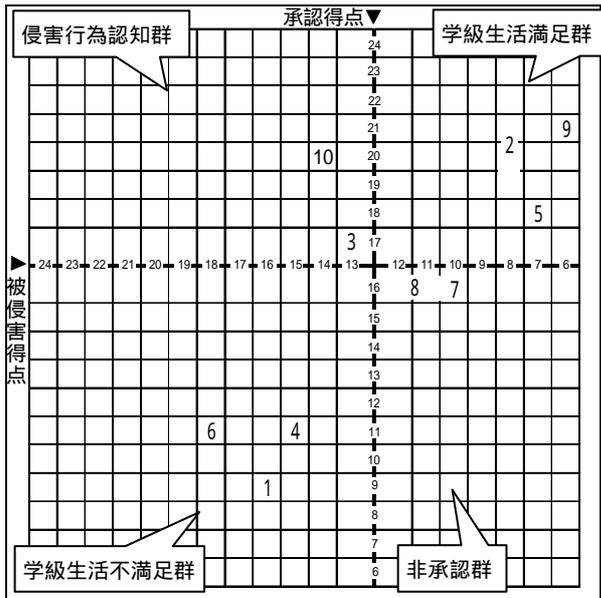


図6 学級満足尺度分布 (H14年10月)

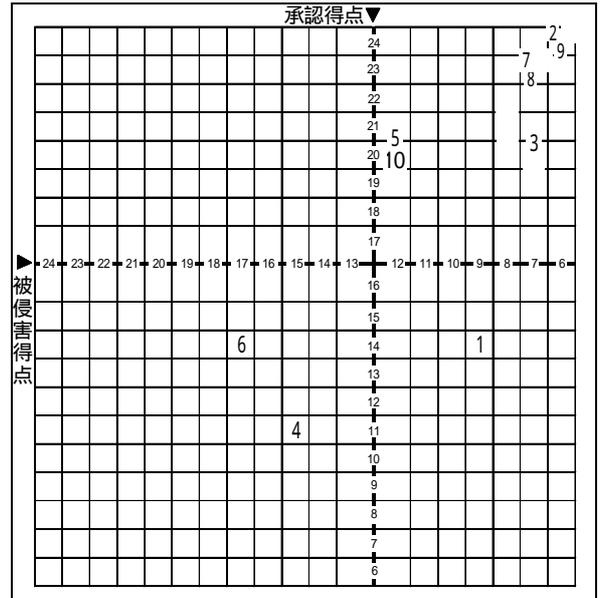


図7 学級満足尺度分布 (H15年2月)

図6と図7は、児童が学級内でどれくらいの承認意識と被侵害意識をもっているか、そのことから学級集団はどのような状態かを、Q-U「学級満足尺度分布」で見たものである。

図6では、4つの群に拡散している状態であるが、図7になると、学級生活満足群に集中していることが分かる。これは、ほとんどの児童に承認意識の向上と被侵害意識の緩和がなされ、学級内に互いを認め合う姿勢ができてきたこと、友達へのよりよい接し方ができてきていることが考えられる。

No1~10は男子, No ~ は女子

No	1	9	6	3	2	7	5	10	8	4	被選 択数	相互選 択
1	1										2	2
9		1									2	1
6			1								2	1
3				1							0	0
2					1						3	0
7						1					2	1
5							1				4	2
10								1			4	1
8									1		3	0
4										1	0	0
											2	2
											2	2
											3	2
											4	2
											4	1
											0	0
											2	2
											1	1
											5	2
											1	0
											3	2
											5	3
											3	3
											4	2
											1	1
											1	1
選択数	2	2	2	2	2	3	3	1	2	3	3	3

図8 ソシオマトリクス(友達関係表H14年10月)

No	1	9	6	3	2	7	5	10	8	4	被選 択数	相互選 択
1	1										1	1
9		1									5	2
6			1								1	1
3				1							7	2
2					1						2	0
7						1					1	1
5							1				3	2
10								1			5	3
8									1		6	2
4										1	2	2
											6	3
											2	2
											3	3
											3	1
											2	2
											2	1
											2	1
											1	0
											2	1
											4	3
											5	3
											4	3
											2	1
											3	0
											0	0
選択数	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

図9 ソシオマトリクス(友達関係表H15年2月)

図8と図9は、児童同士の結び付きと、学級内の小集団がどのような状態であるかをソシオマトリクスで見たものである。(仲よしの友達を3名まで記入できる条件で実施)

図8と図9を比較すると、相互選択と選択の分布に広がりがあることから、学級全体で児童間の結び付きが広まってきていると考えられる。また、図9になると、相互選択と(被)選択の点在が見られること、異性への選択があることから、ある集団に属しながらも、他の集団とのつながりもあると考える。

次に、選択の数に注目すると、3名まで記入できる条件で、図8は「1」「2」が11名であったのが、図9では「2」が1名で、他は「3」となった。これは、仲よしと感じる友達が増えたと言える。また、被選択、相互選択の数も増えており、学級全体で児童間の結び付きが強まっていることが考えられる。

なお、図6、7で、意識の高まりがそれほど表れなかったC4児をソシオマトリクスで見ると、

被選択数も、相互選択数も「0」から「2」へ増えている。これは、自己判断による意識面の変化があまり見られなくても、友達との双方の意識を合わせることで、C4児は友達との結び付きがあることを知ることができる。

図10は、児童の友達、学級に対する意識の変化（学級平均）を10月と2月で比較している。「クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思うか」の意識の向上から、学級集団への所属意識をもててきていると考える。また、友達を「いい人だな、すごいな」と感じていることから、友達への見方が好意的になってきていると考える。学級に対しては、「まとまりがある」「協力し合っている」の意識の向上から、学級集団としての結束を強め、「明るく楽しい」学級であると感じてきていると考える。

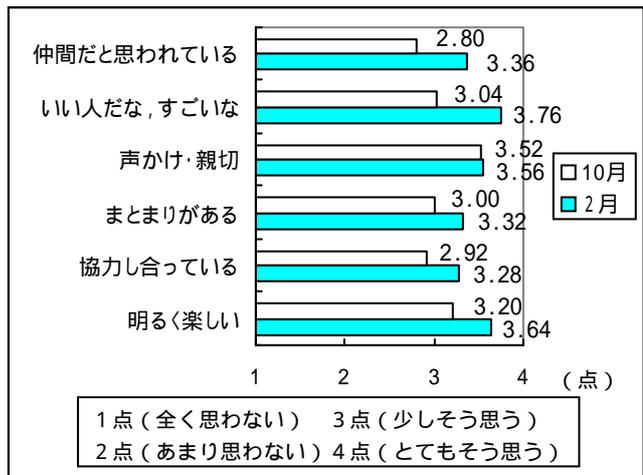


図10 友達、学級に対する意識の変化

これらの質問紙は実践の取組から1か月間の期間を置いて実施しており、児童たちは日々の学級生活において、着実に適切な仲間関係をつくっていったのではないかと考える。それは、仲間づくりの取組後、児童たちが意欲的に友達とのかかわりをもとうとしていること、組織づくりの取組後、クラスの協力を意識して、係活動を意欲的に行っていることからもうかがえる。

これらのことから、本学級の発達段階における適切な仲間関係の要素として、友達への好意的な見方ができるようになったこと、学級集団への所属意識をもつことができたこと、学級内の小集団の結合に表れる友達関係の広がりや、児童相互の結び付きの強まりがあることが分かった。児童たちは、取組の中心となる他者意識をもたせる話し合い活動で、徐々に集団の問題への対し方を知り、実践活動を通して、集団との向かい方を経験し出している。次の段階への移行としては、友達への好意的な見方を広げる活動とともに、他者意識をもたせる話し合いを続け、自発的・自治的活動へと近付けていく必要がある。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 学級の発達の特質から現在の発達段階を明らかにし、次の段階の見通しをもって指導の手立てを設定することは、その時期に付けさせたい（達成すべき）力の育成に効果的であることが分かった。

イ 自分の考えとは違う立場に立たせた考えや、それまで考えていない別の視点での考えで、意見交換を行い、話し合いへとつなげることが、自分と異なる他者の存在を確かなものとして認め、互いを理解し合って成り立つ仲間関係をつくっていく上で効果的であることが分かった。

(2) 今後の課題

学級全体の高まりと比べ、意識面での高まりがそれほど見られなかった児童に対しての効果的な支援方法を探っていきたい。また、適切な仲間関係づくりは、年間を通して行われるべきことであるが、学級活動に充てる時間にも限りがある。そこで、単元の導入期で行った「個の高まりに視点を置いた活動」を、朝や帰りの話し合いの時間等を活用して指導に当たりたい。

《引用文献》

- (1) 杉田 儀作著 『発達の特質に即した集団活動の段階的指導』 1984年 明治図書 pp.34-38
- (2) 國分 康孝総監修 『Q - Uたのしい学校生活を送るためのアンケート』 平成11年 図書文化